

答 辞

比較的穏やかな冬も終りを告げ、日に日に日差しが柔らかくなって春の温もりが感じられる今日ここに、私達の為に盛大な卒業式を催していただき、卒業生一同、心より感謝しております。

二年間という時間は短く、あっという間に過ぎてしまいました。

思い返しますと、ああすればよかった、こうすればよかった、もっと色々しておけばよかったと、反省や後悔ばかりが先にたちますが、この学び舎では、个性的で愉快な仲間達と、とても充実した楽しい日々を送ることができました。

二年前、新しい環境への期待と同時に不安もありましたが、すぐに友達ができ、これからの学院生活への期待が大きく膨らむばかりでした。

そして、とても楽しみにしていた大工道具を始めて見た日、一際、鑿や鉋に目を惹きつけられました。大工道具の代名詞と言ってもいい鑿と鉋には憧れもあり、早く使ってみたいという思いが湧き上がってきたことを今でもまざまざと覚えています。

しかし、その鑿を丸一日中研ぎ続けるということは何日か繰り返すうちに、嫌でつらい作業へと変わり、自分ではうまく研げたと思って”研ぎ直し”と言われることが何よりもショックでした。しかし、これも今は良い

思い出となりました。

このように道具をつくり、それを使っていくうちに、木の木目や表情を見ながら木取りや木組み作業をすることの重要さを学びました。

職藝学院では、人から聞いて学ぶことはもちろんのこと、自分でやって経験しながら身につけることの大切さなど、言葉では言い尽くせない多くのことを学び、そして多くの思い出もつくることができました。

私たちが無事卒業の日を迎えることができたのも、教職員の皆様、関係各方面の皆様方、そして家族の支えがあったからこそだと思っています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

本日、私たちはこの学び舎を巣立ち、次なるステップアップをめざして社会へ踏み出します。これからは、これまでとは異なる環境の中で、楽しいことばかりではなく、辛いことなど様々なことが待ち受けていると思いますが、この二年間はそれを乗り越える糧になるでしょう。

“学生”という名のウォーミングアップ期間は終わりました。これからは自分達が決めた道、自分達が選んだ人生を信じて、悔いなく、思いっきり楽しんで進んでいきます。

時には脱線しそうになることもあるかと思いますが、同期の仲間たちと心が一緒ならば大丈夫だと確信しています。そんな私たちを、厳しく、時には温かく見守っていただきますようお願いいたします。

最後になりましたが、本日も列席いただきましたご来賓各位、並びに諸先生方の御健勝・御多幸を心よりお祈り致しますと共に、職藝学院の今後益々のご発展を祈念しまして、答辞とさせていただきます。

平成二十五年三月二十日

職藝学院 建築職藝科
卒業生代表

北原 康紀